

ソ連人や中国人の出入りが激しかった。

そのうちに生活も大変になったので、心をきめ子供を背負いたばこ・パン・菓子等を売るため、朝五時前に家を出、仕入れて帰るのは九時頃という有様でした。公園のようなところで商売をするので、帰りにはソ連兵に売上げを狙われたことなど幾度もありましたが、やっと切り抜けることが出来ました。

日一日と寒くなり栄養失調と寒さで事前に掘った墓も足りなくなりました。三月頃から八路军と中国軍の戦いがあり私たちの所が戦場となり外へ出ることが出来ませんでした。

四月の中頃子供が急病になり医者もなく一夜にして亡くしました。その頃そろそろ日本に帰れる話が出ましたが、何日のことかわからないので満人の家に働きに出ました。帰ると白い衣類にゴマのようにシラミが付いて弱りました。そんなことより、すこしは心配でしたが町の方へ働きに出ました。

中国兵の炊事仕事でした一日十円でしたが日本人の家と同じ所で安心でした。人間とはその人との付き合い方

だと思いました。中国人と見くびらず精一杯仕事をしました。心が通じたのか日本はまだ治安が良くないから帰るなど言われました。どうせ死ぬなら日本でと思い、帰ると言いましたら皆から二、三百円頂きやっと子供を火葬にすることと、帰りの千円が出来ました。

新京を出発して船に乗るまで一か月、その間三か所の収容所を転々、やっとコロ島より佐世保に入港しましたが、船内の死者が多かったので港外に一週間以上置かれ上陸。北海道に着きました。車中食券ももらいましたが弁当も買えずにいましたら秋田県の或る駅でおむすびを頂きあのおいしさはいまも忘れられません。

家族さがして五か月目

福島県 面川 三良

当時、国策として海外移住が奨励されており、私も青雲の志を抱き、渡満を決意し、昭和十三年五月三十一日づき、本牧郵便局を辞し、六月七日満州国はハルビン市

に移住のため、出発した。私はソ連国境の牡丹江小綏陽
県綏西滿州第八二七軍事郵便所勤務だった。

当時の家族は、妻と子ども二人（一男一女）私の妹と
妻の妹（妹二人は綏西電々勤務）の六人家族だった。

昭和二十年八月九日午前0時、ソ連軍の、日本軍の軍
事施設に対する猛爆が始まった。

午前八時頃、家族は避難のため、午前十時までに綏西
駅に集合せよとの軍の命令がきた。これが私と家族の離
散の始まりだった。その後、軍郵職員は方面軍事司令部
に集結を命ぜられた。八月十三日、状況悪化のため野戦
郵便隊は解散、南下せよとの命によりハルビンに向け出
発した。

昭和二十年八月十五日、ハルビン駅で終戦詔勅の放送
を聞き、終戦を知り、滿州郵政上部機関の指示を受ける
べく上部官庁をたずねたが、ハルビン、新京とも政府機
関はすでになく完全に敗戦国民として放り出された。お
金はなし、家族の安否はわからず、どこへ疎開したもの
やら途方にくれたが、どうしても家族を探そうと同僚四
人で新京を出た。汽車は動かず、暴民に襲われながらの

家族探しは決死の行動だった。難民の集まる大都市を中
心に新京、奉天、四平街、梅河口で暴民に襲われ、日本
人全部が撫順に疎開した。

撫順で約一か月、ソ連の撫順石炭の積みこみ作業の二
十四時間の交替使役だった。これでは家族を探すことが
できないので、前記の人と奉天に脱出し、通化に家族が
いるらしいとの情報があり、昭和二十一年一月四日通化
に向け、四人で出発、一月九日ぶじ家族と再会できた。

二月三日通化事件が発生、北朝鮮軍に抑留、一か月厳
しい取り調べをうけたが、ぶじ帰宅できた。同僚一人は、
この事件で犠牲となった。この事件で数千人の日本人が
殺された。釈放後、八路军の雑役夫として採用され、二
か月働いたが、賃金の支給がないので、妻一人の働きで
親子四人の生活はたいへんだった。以後、自由労働者と
して引揚げの昭和二十一年九月十八日まで頑張ったが、
子ども二人が栄養失調でフラフラとなり、日本まで持た
ないと危惧されたが、十月一日佐世保港に上陸できた。

十月六日、ぶじ故郷に帰り、十一月五日、鏡石郵便局
へ再就職できた。